レバノン シャティーラ難民キャンプで子どもたちと共に

「子どもの家」とジャミーラ・シャハディさんのこと

シャティーラのボランティアたち

レバノンの首都ベイルートにあるシャティーラ難民キャンプは、1949年に設立されました。故郷を追われたパレスチナ難民が「一時的」な生活を始めた場所です。以来シャティーラキャンプの難民は、1982年のサブラ・シャティーラ虐殺事件など数多くの破壊を経験してきました。パレスチナ難民の他に、いまではシリア難民、シリアからのパレスチナ難民、イラク難民、バングラデシュやエジプトからの出稼ぎ労働者も居住し、1キロ四方の限られた空間は2万人以上の生活の場です。キャンプ建設当初にはあったという緑地も住居に変わり、人が一人通れるか通れないかというような陽の差さない路地の両側に住居が立ち並んでいます。無数に張り巡らされた電線が頭上に走り、処理が追いつかないゴミが路上に溢れ、生活排水が路上を流れ、異臭が漂う空間。シャティーラはレバノンの中でも最も住環境が劣悪な難民キャンプと言われています。

当会では、このシャティーラで長年にわたって、現地のNGOである「子どもの家」と共に幼稚園、補習クラス、子ども歯科などの支援を続けてきました。ここ3年はそれに加えて、シリア難民支援も行っています。

「子どもの家」の幼稚園や補習クラスに来ている子どもたちはどのような生活をしているのか、「子どもの家」のスタッフはどんな人たちなのかご紹介します。

路上で過ごす子どもたち

サラーハくん（5歳）とヌールさん（7歳）はシャティーラ生まれの姉弟です。一家には7人の子どもがいましたが、一番下の弟は先日亡くなり、3人の姉は北部のナハルエルバレド・キャンプの祖母の家に、2歳の妹はベイルート市内の児童養護施設で暮らしていて、姉弟と両親の4人暮らしです。ナハルエルバレドからシャティーラに嫁いできたお母さんは、シャティーラでの生活に馴染めず、また経済的な不安もあって精神疾患に罹って家事も育児もできなくなり、姉弟は毎日朝から夜遅くまで路上でお腹を空かして過ごしていました。それを見かねた「子どもの家」センター長のジャミーラさんが、二人をセンターに連れてきて体を洗い、食事を与え世話をするようになりました。今年2月からサラーハくんは幼稚園年少組へ、ヌールさんは幼稚園と補習1年生クラスに通うようになりました。

公園で一人ご飯を食べる
サラーハくん（3月）

プリンを食べて満足なサラーハくん（5月）

3月幼稚園では親子遠足がありましたが、他の子どもたちが楽しくはしゃいでいる中、ご飯を食べるときも、みんなが走り回っているときもサラーハくんは皆から離れ、ヌールさんも保育士の声かけにも応じることなく一人で黙々と砂遊びをしていました。

ジャミーラさんや保育士は、家庭訪問を通じて母親と少しずつ話をし、時には調理を手伝うなど母親を支えた結果、センターに通い始めて三カ月たった5月には、サラーハくんが友達とテーブルを囲みおしゃべりをしながら給食を食べている姿がありました。ヌールさんも補習クラスで読み書きを覚え、9月からは国連の小学校への入学が決まったそうです。

貧しいからこそ幼稚園に

アハマドくん（5歳）とレイヤールちゃん（4歳）もシャティーラの幼稚園に通う兄妹です。お父さんはゴミ収集等の日雇い仕事をしていますが、生活を支えるのに十分な収入を得ることができません。お母さんも地方からシャティーラに嫁いできてここでの生活に馴染めず、部屋に引きこもっていたそうです。妻が育児を放棄し、3人の子どもを抱え途方に暮れた父親が子どもの家のセンターを訪れ、ジャミーラさんに「子どもたちを幼稚園に通わせてほしい」と懇願しました。幼稚園はすでに定員に達していたため断ると、お父さんは「家が貧しいから、貧しいものは幼稚園にも通わせてもらえないのか」と訴えたそうです。ジャミーラさんは、「貧しくどこに行くこともできない子どもこそ、このセンターで受け入れるべきだ」と思い、子どもの入園を特別に認めました。二人には頭シラミがいるなど衛生状態も悪く、まずは衛生面を改善することに取り組みました。これまで小さな一室から出ることのなかった親子に支援が届きはじめたのです。

はじめて遊具に乗って不安げな
レイヤールちゃん（冬）

レイヤールちゃんとお母さん、
笑顔が見える（6月）

アハマドくんは生まれつき足が不自由で手術を受けましたが、再手術が必要で幼稚園の教室では転倒することが多く、他の子どもたちのように走り回ることができません。一家は6階に住んでいて、毎日足を引きずりながら長い階段を上り下りしています。レイヤールちゃんは部屋から出たことがなかったためか、人見知りが激しく泣き出してしまうこともしばしばでした。給食の時間もレイヤールちゃんは一口も食べず黙って椅子に座っているだけ。そんな状態が続いていましたが、保育士とソーシャルワーカーがお母さんとも真摯に向き合い、子育てや生活のアドバイスを行ってきた結果、6月に親子で幼稚園に来た時にレイヤールちゃんの笑顔をはじめて見ることができました。アハマドくんも幼稚園で読み書きを一通り身につけたため、新学期からは国連の学校に入学予定です。

深い心の傷

アビールさん（3年生）は4年前にシリアから避難してきたパレスチナ人で、2014年から補習クラスに通っています。学業成績は常にトップクラスですが、一言も言葉を発しませんでした。ファミリーガイダンスセンター（児童精神科のクリニック）で専門医の診断を受けたところ、シリアでの戦闘や避難先の生活で何らの心的ショックやストレスが影響している可能性があるものの、明確な原因はわからないとのことでした。指導員の語りかけにも頷くなどの反応はみせるものの、クラスの仲間とも距離を置き一人でいることが多かったアビールさん。それでも補習に、また毎週金曜日のリクリエーション活動に欠かさず参加していました。指導員は焦らず時間をかけて話しかけ、一人でぽつんと立っている彼女の手を引きそっと輪の中に入れてきました。彼女を特別扱いすることなく見守ってきたのです。そんな彼女も少しずつ自分のペースでシャティーラでの生活にも慣れ、クラスにも数人の友達ができ話もするようになりました。補習クラスに通い始めて3年目の今年、なんとアビールさんが自ら手を挙げて発言しようとしている姿を目にすることができました。

一番後ろに座っているアビールちゃんも挙手した

シャティーラに暮らすどの家族も何らかの問題を抱えています。住環境が劣悪で健康維持も難しく、日光の届かない暗い部屋で毎日過ごしていると未来はないのではないかと心がふさぎがちになります。ジャミーラさんは「絶望的な状態だ」と言いつつ「私たちはここで生きていくしかないの。この子どもたちの問題は現状では解決できないの。ほんの少しでも改善したらそれで良いのよ。ほら、サラーハとヌールが路上で過ごす時間は一日から半日に減ったでしょ。衛生状態も前よりはだいぶ良くなったわ」。

子どもたちを気にかけ、近くで手を差し伸ばす人たちの存在。私たちにできることなんて非常に限られています。でも、ジャミーラさんをはじめスタッフの子どもたちや家族への接し方を見ていると、諦めない気持ちと心の通った支援の重要性に改めて気づかされます。

ジャミーラ・シャハディさんのこと

シャティーラ生まれ。お母さんは読み書きができなかったので、子どもたちには教育の大切さを常に伝えてきたそうです。ジャミーラさんは幼いころから学校が大好きで、教師になることを目指して大学でアラブ文学を学んでいました。しかしレバノン内戦が始まり、シャティーラは包囲や攻撃を受け、1982年の虐殺事件ではキャンプの90パーセントの住居が破壊されました。ジャミーラさんの家も大きな被害を受け、4部屋あった家は3方の壁が残っただけの小さな1室が残されただけ。この空間で家族全員が生活しなければならない状況となりました。

大勢の死傷者と瓦礫のキャンプ。成人男性は殺害や拘束の対象となるため、キャンプでは女の人が外に出て水や食料を確保するしかありません。ジャミーラさんは、両親が殺害されてしまった子ども、お腹を空かしている子ども、瓦礫で怪我をして泣いている子どもを見て「この子たちの安全を何とか確保しなければ」と思いました。そして子どもたちを集めた幼稚園を開設しました。瓦礫を取り除いただけの、おもちゃも鉛筆も何もない建物内で、歌を歌いお話を聞かせるだけ。こうして子どもたちに寄りそう生活が始まりました。

「教師になりたいという夢があったけれど、状況がそれを許さなかったの。目の前の状況に対して“自分にできること”をやるうちに、いつの間にかソーシャルワーカーになっていたわ。自分の夢をかなえるためにキャンプから離れるという選択は考えられなかった。今でも古い友人に『どうしてまだ、こんな状況のシャティーラに住んでいるの？』と聞かれるけれど、私は祖国パレスチナに帰るまでシャティーラを離れるつもりはないの。ここには問題を抱えている家族がたくさんいるの。同じパレスチナ人として彼らを支えていくことが私の役目だと思っているわ」

ジャミーラさん

シャティーラ・センターには、幼稚園の保育士、ソーシャルワーカー、歯科医師と看護師、補習クラスの指導員と、ボランティアも含めて常時20人程度がいます。そして、幼稚園児70人以上と補習クラスの生徒50人以上が毎日通ってきます。

アサッド君とイブラヒム君のこと

アサッド君

6月20日は世界難民の日でしたが、5か月前までブルジバラジネの補習クラスに通っていたシリア難民のアサッド君（7歳）が、交通事故で亡くなったという悲しい知らせを受けました。アサド君の一家は、ヨーロッパを目指して5か月前にトルコに渡ったものの、移動が制限されたためトルコに留まらざるを得ず、アサッド君とそのいとこは生計を助けるため、路上でティッシュを販売していたそうです。アサッド君たちは、ティッシュを売りながら道路を渡ろうとしたところを車にはねられ、二人とも他界したとのこと。

アサッド君は、補習クラスに来ていた時も栄養状態がよくないためか、非常な苦労をしたせいか、大人びた表情で記憶に残っています。給食をおいしそうに食べていたこともありました。補習指導員によれば、非常に成績の優秀な少年だったとのことでした。レバノンにいた方がよかったのかトルコに行った方がよかったのか、今となってはですが、とても無念に思います。

シャティーラでも補習クラスのイブラヒム君が家で感電死したということを最近聞きました。短かった子どもたちの生涯を心から悼みます。

お母さんたちへのサポートも継続しています

前号のサラームでも少しご紹介しましたが、乳幼児を抱える母親の多くにうつ症状が見られます。シャティーラの隣にあるブルジバラジネキャンプの育児ワークショップで、産後うつについてのアンケートを取った所、97人中77人にうつの可能性があり、63％が不眠を訴え、53％が自分を責めいて、11％に自殺・自傷願望があるなど地元の専門家も驚いていました。今年はブルジバラジネやシャティーラだけでなく、ワーベルやサイダでも育児ワークショップを開催していて、シリア難民やパレスチナ難民のお母さんを支援しています。

またブルジバラジネ、南部のブルジシェマリとラシャディエで、今年は産婦人科の診療も行っています。経験豊かな女医さんが担当していて、感染症治療や妊婦健診、国連から薬がもらえないシリア難民に対する薬剤の提供や検査なども行っているほか、ストレスを減らすためのストレッチ体操、乳がんの自己発見法なども教えています。